

## 唐招提寺伽藍の創立をめぐる問題

——仮称「唐招提寺派」木彫群の背景として——

齊 藤 孝

### 一 唐招提寺の造営に関する問題

現在の唐招提寺の寺地が平城京のどこに当るかについてはいろいろ論ぜられているが、唐招提寺の第三世豊安が承和二年ごろに撰したと言われる「唐招提寺建立縁起<sup>(1)</sup>」に

寺家一院、地肆町、在<sub>三</sub>右京五条二坊<sub>一</sub>、東塔、南巷、西路、北路、

とあるのを、この唐招提寺は、平城京右京五条二坊に方四町の面積を持ち、それは、同条坊内の九・十・十五・十六の四坪を占めるものであったと解釈する、福山博士・田中重久氏・毛利博士等の説が穩当なように思われる。<sup>(2)</sup> その寺地にいつごろから伽藍の造営が始められ、いつ落成したかが、この唐招提寺をめぐる最も注目すべき問題として、今までからたびたび各学者の論議をまきおこして来た。しかも、一つの伽藍が実質的に寺院としての内容を持つのは、本尊仏とそれを安置する金堂がそなわった時であるから、この唐招提寺においても、金堂の造営された年代をつきとめることが論争の焦点となったことは言うまでもない。

ところが、この問題をめぐって学者の説は大体二つに分れている。即ち、

(一) 万里の波濤を越えて唐から我国に戒律を伝えた鑑真和上、その偉大な僧に対する上下の非常な尊崇を背景として、天平宝字三年に寺地を賜ってから造営の工はいちはやく進み、同七年の和上遷化までに諸堂はそなわっていた。とするものと、

(二) 唐招提寺は、造寺司を通じ国家の大きな組織力を結集して建てられる官寺ではなく、どこまでも鑑真個人の私寺にすぎないから、朝廷の庇護を受けない寺の財力にはおのずから限りがあり、和上の在世中にはとうてい伽藍の完成は思もよらず、むしろ、和上の後を継いだ思託や如宝の経営によって、やっと寺の形を成したのであって、それには、天平宝字三年以後長い年月が必要であった。

と言う考え方とである。

前者の立場による有力な学説は小林剛・毛利久両博士のそれであろう。小林博士は、「続日本紀」天平宝字元年十一月廿八日の条に言う、当時はまた東大寺唐禅院にいた鑑真に十方衆僧供養料として寄せられた備前国墾田一百町は、「東征伝」では『大和上以<sub>三</sub>此田<sub>三</sub>欲<sub>レ</sub>立<sub>三</sub>伽藍<sub>三</sub>』とあり、同趣旨のことは諸書にもみえることから、この田料が唐招提寺の造営費用にもまわっていたことが察せられるので、他の論者の説くように、創立当初、唐招提寺の財政事情が悪かったとは考えられず、むしろ、この一百町の水田を経済背景にして積極的に造営が行われ、金堂も和上の生前に落成していたに違いない。と言う意見である。しかし、備前国水田一百町が唐招提寺の造営料になったと明かに記しているのは「東征伝」だけで、統紀天平宝字七年五月戊申の鑑真伝、「鑑真和上三異事」<sup>(4)</sup>「唐招提寺建立縁起」等はどっちにもとれるあいまいな表現になっているばかりではなく、延暦二十三年正月戊戌に行われた唐招提寺第二世如宝の言上には、先に朝廷から『越前国水田六十町、備前国田地一十三町』を賜わったことを述べながら、墾田百町歩

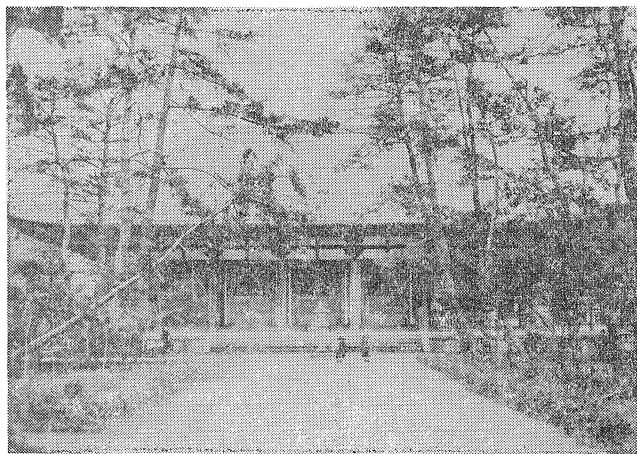
には全く触れていないこととともに、この墾田が唐招提寺の寺領とどのような関係にあったのかにまだ疑問の点が多く、福山敏男博士のいわゆる東征伝作爲説にはまだ耳を傾けるべきものが多いように思われる。

次いで毛利博士は、唐招提寺所蔵の「唐招提寺用度帳」断簡を検討され、この文書には食堂を始め、東北第一房・同第二房・西北第二房・叡□師房・佐官師房・政所・大衆西殿・大衆南小部屋・油倉・草倉・藁倉・木屋・板屋・水屋・碓屋・作入膳屋等多くの建造物の用度を記し、当時こうした造営が着々と進んでいたことを思わせるが、その記載の中に『一石一斗、充唐和上非時薬作用料』の一項があり、この「唐和上」は当然鑑真のことと解されるばかりではなく、彼の非時の薬の料とある以上は、少なくとも鑑直和上遷化の直前に用いた薬を指すものと考えられ、その事を記すこの用度帳は、天平宝字七年またはそれ以前の状況を物語る重要な史料となる。そして、食堂を初めこれだけの建物ができつつあった唐招提寺に、伽藍のかなめとなる金堂がそれまでに完成されていないはずがない。と論証されている。けれども、この文書に使われている釣、蔵、糟、鉈、比留、金等の建築用語は恐らく延暦ころをさかのぼらないことを福山博士が指摘されているうえ、「唐和上非時薬」とは、鑑真生前の病に用いた薬のことではなく、むしろ和上の死後に、その肖像に供えた中食の後の御飯を指す。と言う説があり、この文書を毛利博士のようににはわかに解釈できないようになってきた。

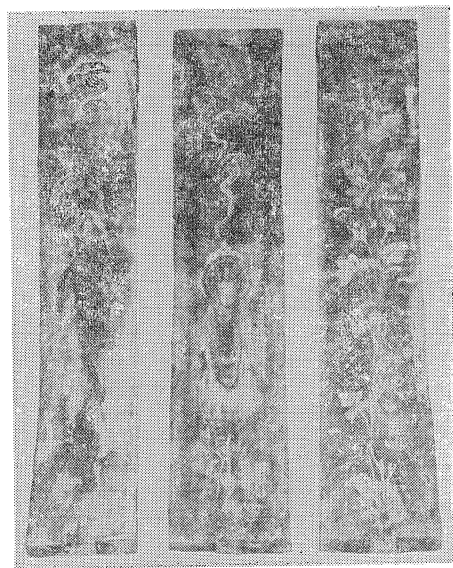
後者では、これを更に二説に分けることができる。その(1)は、金堂が宝亀の中頃から十年までの間に建ったとするもの、(2)は、更に下って大同末年から弘仁年間に比定するものである。便宜上(2)から述べると、これには福山博士と久野健氏の説が注目されよう。両氏は、「唐招提寺建立縁起」に少僧都如宝が有縁の檀主を率いて建立したとみえることによって、如宝が少僧都に任ぜられたのは大同元年(AD 806)正月廿二日であるから、金堂はそれより後、特に平城上皇の如宝に対する御帰依の厚くなった弘仁元年より、弘仁六年(AD 815)正月に如宝が入寂するまでの

間に建立されたと推定されている。福山博士はその裏付として、宝亀年間では、唐招提寺にはまだ封戸五十畑と十三町の公認田地しか無かったらうから、現在みるような雄大華麗な金堂を建てるようには無かったものと考えられた。しかし、後に説くように、宝亀頃の唐招提寺の寺領は、福山博士の言われるような小規模なものではなかったと思われる。これと同じような意味で久野健氏も、大同から弘仁にかけて次々と封戸が施入され、唐招提寺の寺領はむしろこの頃に拡大されたように説かれるが、それどころか、封戸に関する限り、この時期の唐招提寺の収益は著しく減少しているのである。なお又「建立縁起」に『少僧都如宝』と書かれていると言っても縁起を草した唐招提寺第三世の豊安が、先代の如宝を敬って名の上に彼の最終僧綱位を冠したにすぎない。とも解されるから、金堂が如宝の力で建ったことは事実としても、それを少僧都補任以後としなくてはならぬ必然は無い。その上、これも後に明らかにするが、金堂以外の枝葉の諸堂が、すでに延暦頃には次々とできあがっていたらしい形跡があり、一人金堂だけが弘仁頃までおかれていたとはうなずけない。

ところが、久野氏の弘仁説には次のような別の理由がある。すなわち、金堂に安置されている中尊盧舍那仏坐像と脇侍の千手観音・薬師如来の立像とを比較すると、中尊は脱活乾漆で様式も天平・様式に属するが、千手と薬師は木心乾漆から成り、様式も多分に貞観風が加味されてきている。これは、中尊と脇侍との間に造顕年代の開きがあるものとみられる。今、中尊の製作時を宝亀年中とすれば、脇侍を大同・弘仁頃に下げて考えることも可能である。ところが、現在の金堂は、最初から彼の三尊を安置することを前提に設計されていて、三尊各像の法量と内陣空間の広さには不調和なところが全く無い。従って金堂が建った時は脇侍の造られた年代に相前後するものであり、少くとも宝亀年中ではあり得ない、と言うことなのである。けれども久野氏は、宝亀にできあがったとされている中尊が現在の金堂が建つまでの間に安置されていた場所として、史料には現れてこない『仮金堂』と言う物を想定されねばならな



唐 招 提 寺 金 堂 (唐招提寺大鏡より)



唐招提寺支輪板彩画 (同上)

った。しかしここは、宝龜年中に盧舎那仏が造られたと同時にこの建物が出来、脇侍の場所は像のできるまで空白に残してあったと考える方がより自然ではあるまいか。<sup>(41)</sup>そして、すでにきまっている内陣の大きさに、脇侍の丈量を逆に合せていったものとも解釈出来るから、三尊ができて後にその大きさに合せて内陣空間が初めて割り出されたと考ええるべき必然性はない。それに、現金堂の建築様式にも、積極的に平安時代を示すものが無いのではないか。現存の金堂の細部が一切旧状のままでないことは勿論であるが、浅野清博士も後世の変更は殆んど認められないとされている斗拱<sup>(42)</sup>をみると、斗拱全体の形が伸びやかで張りをもち、肘木にも笹繰りが取られているところは、東大寺法華堂や当麻寺東塔等、天平時代の代表的な建築物の斗拱の様式に通ずるものがあり、平安初期に建立されたと考えられている室生寺五重塔や当麻寺の西塔の斗拱では、肘木の笹繰りも無くなり、全体の積み上げは狭高となって、早くも奈良朝の建築細部とは違った気分がはつきりとうち出されていることを思うと、唐招提寺の金堂は斗拱に関する限り奈良朝様式である。虹梁や内陣構架の板墓股、更に軒や天井周囲の支輪等の形態にもどれほど平安様式を主張する要素があるであろうか。有名な支輪板の彩面にしても様式的に硬化してはいるが、そこに画かれた草花はやはり天平的と言ふべきであり、飛雲の形も又世に言う「天平雲」(挿図・下参照)ではないか。<sup>(43)</sup>今日、四注造本瓦葺の屋根の棟に高々と鶏尾を上げ、正面一間通りを吹放しにして整然とした柱列の美しさをみせるあの金堂の姿(挿図・上参照)を、天平仏殿建築の典型とみることに異論はないであろう。それは、この唐招提寺の金堂が、天平宝字三年から四年にかけて建立された法華寺阿弥陀浄土院を模して造られたらしいことを、福山博士が明らかにされたことにより、いっそうはつきりと確められた。<sup>(44)</sup>尤も、その模造された時期は不明であり、或いはその時が平城上皇の時代のことであったのかも知れない。けれども、平安時代に入ってから法華寺は急速に衰退して行ったもようである。阿弥陀浄土院の全盛時代も、天平宝字五年に光明皇后の国忌の斎会の場所に指定されてから、文室真人浄三が浄土院の別当であった宝龜頃までの間にあるので

はあるまいか。この、まだ天下に美観をうたわれている時期こそ、その姿を他寺の堂宇にうつされるにふさわしい時であり、彼の浄三が、平城京の建物を唐招提寺の講堂として移建するさいの別当になっていることからすると、浄三は『法華寺大鎮、浄土院別当』<sup>(9)</sup>と言う地位にありながら、唐招提寺との縁も又非常に深かったことになるから、唐招提寺の金堂が法華寺浄土院の建物に準じて建てられる最もふさわしい時期は、やはり浄三との関連において宝亀頃とするのが一番穩当ではなからうか。

## 二 金堂は宝亀の建立

このようにみて来ると、改めて(1)の宝亀建立説がクローズアップされて来る。さて、福山博士等の説では、宝亀年間での唐招提寺の寺領はまだ実に微々たるものであったと言われる。しかし実際の唐招提寺は、当時すでに想像以上の経済的地盤を確保していた。食封としては、宝亀七年に播磨国の五十戸が施入されたが、そのほか、先にも触れたように越前国の水田六十町と備前国の田地十三町を寺は持っていた。

「如宝言上」が述べるように、以上の水田が延暦二十三年から五十年も以前に施入されていたとは受け取れないが、文意からすれば、延暦二十三年当時が施入以来すでにかなりの年月をへたものであったことを暗示されてはいまいか。そして、その施入の年を宝亀と関係させて解釈することもあえてふつごうではない。現に、彼の「如宝言上」に應じて下された太政官符は、

(前略)

田地一十三町在<sub>二</sub>備前国<sub>一</sub> 宝<sub>・</sub>亀<sub>・</sub>八<sub>・</sub>年七月廿六日官符

水田六十町在<sub>三</sub>越前国<sub>一</sub>用<sub>三</sub>知識物<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>買<sub>一</sub>

(下略)

と述べている。従ってこれ等の土地が宝亀年間に寺に獲得されたことはほぼまちがいは無い。ここで、越前国の六十町については寺が私的に購入したことになるが、宝亀頃の唐招提寺は、みずから寺田の買得に積極的に動いていたらしい。その一例は宝亀七年十二月十一日付「備前国津高郡津高郷陸田売買券」<sup>(4)</sup>で、ここでは合せて三段三十二歩の畠が購われた。その上、かなり年代は下るが、文徳実録仁寿三年十月十九日の条によると、唐招提寺では、田地百七十八町四段廿三步と言うものが、宝亀年間に買われていたことになっている。この史料をそのまま信用することはもちろん無理ではあるが、この頃の唐招提寺には、造営活動にはさしきわり無いだけの経済的裏付が急速についていたことは事実であろう。

ちなみに、この文徳実録の記事は一種の寺伝を説いたにすぎないのであるが、その寺伝がなぜわざと「宝亀」と言う年号を選んだのか。と言うことをもう一度反省する必要はないだろうか。最近、唐招提寺伽藍の実質的な発展が、如宝が少僧都となった大同・弘仁の頃にあると言うことが強く主張されている。けれども、もしそれが本当ならば、文徳実録の記事が、なぜ如宝の名を掲げず、「大同」、「弘仁」と言う年号名を用いなかったのであるうか。これはやはり、平安朝当時、唐招提寺の歴史に関心を寄せる人々の間では、「宝亀」と言う年代に寺史を画するに足る発展のあった事実が、等しく認められていたからではないか。このような寺運の興隆期こそ、金堂の造営される最大の好機であろう。宝亀十年に書かれた東征伝の中で、思託は『今遂成<sub>レ</sub>寺』と高らかにさげんでいる。このような実感は、一寺のかなめである金堂が建っていてこそ初めて生れるものである。そして先にも触れたように、現在の金堂の建築様式にも、必ずしも平安建築の要素が無いことを勘え合せ、私は、金堂の宝亀建立こそ妥当と考える。



### 三 諸堂の造営

以上の考察で、金堂は奈良朝末期の宝亀年間に建てられたと推定されたが、この金堂に先立っていちはやく存在したと思われるものは講堂である。講堂は「招提寺建立縁起」にも

右平城朝集殿施入、仍件堂造如<sub>レ</sub>件

とあり、早くから平城京の東朝集殿を移建したものと伝えられて有名であった。現在の講堂の建築に、この伝を立証する部分が残っているかどうかが問題であるが、浅野清博士に従うと、現講堂の身舎の虹梁上にある板墓股や、元は外陣の繫虹梁の上であり、現在では側間斗束の下に流用されている板墓股に、その旧位置を墨書した物がみつき、その記載内容から、この墓股を用いたものと建物は、南北に長くて東面か西面していたことが想像されると言われ、このことから、講堂の建築が平城京の朝集殿であったとしても、大してさしつかえはないようである。そして「延暦僧録」に引く文室真人浄三伝によれば、

(前略) 朝命任<sub>二</sub>大鎮兼法華寺大鎮・浄土院別当<sub>一</sub>、大内施<sub>二</sub>先上解歇九間屋<sub>一</sub>入<sub>二</sub>唐寺<sub>一</sub>為<sub>二</sub>講堂口<sub>一</sub>、勅台<sub>二</sub>別當<sub>一</sub>、因<sub>レ</sub>茲伏<sub>二</sub>膺大和上鑒真<sub>一</sub>為<sub>二</sub>菩薩戒弟子<sub>一</sub>(後略)

とあり、浄三は、朝廷がかの朝集殿を唐招提寺に移す時その別當を務め、それが縁で鑑真に帰依して菩薩戒弟子になったと言っているのである。すると講堂は和上の生前に存在したことになる<sup>(91)</sup>。さらにおもしろいことは、彼の東征伝には金堂については全く記すところが無いのに、講堂の記事ははっきりとみえるのみか、僧忍基は、この講堂の棟梁が折れるのを夢見て和上の遷化をさ<sub>二</sub>つた<sub>一</sub>と言う。以上のことからみて、講堂だけは、天平宝字七年和上の入滅以前にで

唐招提寺伽藍の創立をめぐる問題

六二

きあがつていたことはたしかなようである。

食堂については、護国寺本の建立縁起と醍醐寺本のそれとでは記載法が多少違っている。即ち護国寺本では、

一食堂一宇、安置障子薬師浄土一

右藤原仲麻呂朝臣家施入造立如件

とあるのを、醍醐寺本では

(前略)

右藤原仲麻呂朝臣宝座施入造立如件

と、「家」が「宝屋」に変わっている。毛利博士は、この両文のいずれを正しいとするかについては慎重な態度を持しておられるが、護国寺本の方がすっきりと書かれているのに、醍醐寺本では、かんじんの部分の表現があいまいである。醍醐寺本は、奥書によって鎌倉時代の建永二年七月十日に書写され、同九月六日に光淵が校正をおわったことがわかるが、この校正の時、「宝座」となっていた本文を、光淵が前後の意味を推量して「宝屋」と訂正したのである。したがって醍醐寺本の「宝屋」と言う記載は、既に客観性を欠いていると言わねばならない。そして、この「宝屋」の語句が生まれたのは、おそらく、護国寺本以下の古写本類が『仲麻呂朝臣家』としているその「家」を仲麻呂邸の家屋を指すと解釈した上での潤色によるものであろう。一方、護国寺本の奥書は、この写本が平安時代の長和四年に書かれたことを示している。したがって、いろいろな意味で、護国寺本の建立縁起の方こそ、その信憑性は高いと言わねばならない。そして、護国寺本に言う『仲麻呂朝臣家』は、毛利博士も説かれたように、仲麻呂邸の建物ではなくて、むしろ仲麻呂一族そのものへの尊称と解すべきものである。ゆえに食堂は、仲麻呂の歿後に没官された家屋が施入されたのではなく、仲麻呂が生前に檀那となって費用を出し、建立に着手していたものであろう。ところ

が、先にも触れたように、延暦をさかのぼらないと言われる「唐招提寺用度帳」の中に食堂の金具のことが含まれていることからすると、この頃になっても食堂は十分に完成していなかったらしい。これは少々変なようだが、藤原仲麻呂の失脚したのは天平宝字八年九月であるから、恐らく食堂は、工をおこすやいなや急に檀那を失って一頓坐をきたし、年月をかけて改めて財をつのり、やっと完成に至ったものと思われる。このようなわけで、私は、食堂の建つたのは天平宝字七・八年頃から延暦までの期間と考えたい。<sup>(94)</sup>

唐招提寺の建物で、これらのほかに忘れてならないのが羅索堂である。羅索堂は、建立縁起に

一 羅索堂一字、安置不空羅索并像一軀金色并八部衆一

右入唐大使藤原清河卿屋施入造立如件

とある。こちらは先のように「家」ではなく「屋」であるから、文字通り清河の宅が施入されたとしてよいであろう。藤原清河は、鑑真和上最後の渡海を助けた第十次遣唐使の大使で、ついに帰国できず、唐朝につかえて彼の地に歿した。その死が我国に伝えられたのは、宝龜九年十月から十一月にかけて帰朝した第十四次遣唐使によるらしいから、清河の宅が唐招提寺の一堂として施入したのはこれ以後とみてさしかえない。そして「類聚国史」延暦十一年十一月乙丑の条に、この清河の一族が宅地を捨てて済恩院と言う寺をおこしていることがみえるから、清河の菩提をとむらうため、鑑真との縁の深い唐招提寺に家族が邸宅の一部を入れたのもこの頃であろう。

らさに当寺には藥師院八角堂と言うものがあつた。「延暦僧録」第五の藤原種繼伝に、

(前略) 劍<sub>二</sub>手皮<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>画<sub>二</sub>藥師浄土變<sub>一</sub>鋪<sub>二</sub>、(中略) 今請<sub>二</sub>像於唐<sub>一</sub>・律<sub>・</sub>招<sub>・</sub>提<sub>・</sub>藥<sub>・</sub>師<sub>・</sub>院<sub>・</sub>造<sub>・</sub>八<sub>・</sub>角<sub>・</sub>堂<sub>・</sub>中<sub>一</sub>

とあつて、延暦の初年頃には建っていたらしい。建立縁起にみえる二基の八角堂のいずれかはこの堂にあたるものである。

## 唐招提寺伽藍の創立をめぐる問題

六四

この寺に最初は塔の計画は無かつたらしい。それが、東方へ寺地が拡張されたのを機会に塔の建立がおこなわれたものとみえ、<sup>(98)</sup>「日本紀略」弘仁元年四月甲申の条に、

遣<sub>ニ</sub>散位外從五位下江沼臣小並等<sub>一</sub>造<sub>ニ</sub>招提寺塔<sub>一</sub>。

とある。

又建立縁起には

(前略) 平城天皇復欽<sub>ニ</sub>先帝之崇<sub>一</sub>師更仰<sub>ニ</sub>和尚之塵躡<sub>一</sub>、粉<sub>ニ</sub>則珍<sub>一</sub>建<sub>ニ</sub>制度<sub>一</sub>似<sub>ニ</sub>多宝之涌出<sub>一</sub>、毀<sub>ニ</sub>王宮<sub>一</sub>以作<sub>ニ</sub>長廊<sub>一</sub>、凝<sub>ニ</sub>能仁之化城<sub>一</sub>。(後略)

と、平城天皇が塔と共に廻廊を建立されたことが暗示されている。福山博士は、「招提千歳伝記」によって、天長元年七月平城上皇の崩御後に、その古殿廊が施入されたとしておられるが、ひとまず従うべきであろう。

以上のほか僧坊をはじめとする多くの雑舎があるが、これらについては、「唐招提寺用度帳」や「招提寺建立縁起」の記事ではいかにも断片的なものと、当面の問題には必ずしも関係が深くないから、ここでは触れないことにする。しかし、今まで述べて来た創建当初の主要伽藍の年代をもう一度順に整理するならば、

- |            |             |
|------------|-------------|
| (1) 講堂     | 天平宝字七年以前    |
| (2) 食堂     | 天平宝字七年以降延暦頃 |
| (3) 金堂     | 宝龜年間        |
| (4) 薬師院八角堂 | 延暦初年か       |
| (5) 綱索堂    | 延暦十一年前後     |
| (6) 塔      | 弘仁元年        |

## (7) 廻廊

天長元年以後か

となる。これによっても分かるように、唐招提寺は、天平宝字三年に寺地が正式に定まって以来、約七十年をかけてえいえいとして営まれてきたのであり、しかも、この伽藍を實際に造営したのは鑑真和上ではなく、和上は諸堂の完成をほとんど目にせずに他界し、実は、次の代を受け継いだ如宝が立役者であった。この寺が鑑真ではなくて如宝によってできあがったこと、これはまず絶対に記憶しておかねばならぬことである。

## 四 金堂諸仏の造顕

この唐招提寺の創立事情に最も密接な関係をもって造られているのは、なんと言っても金堂の諸尊であろう。その諸仏とは次の通りである。

盧舍那仏坐像

坐高三〇三糎

千手観音立像

像高五三六糎

薬師如来立像

像高三七〇糎

梵天・帝釈天・四天王

各像高一九〇糎前後

ただ、梵天以下の像は、盧舍那仏や、千手・薬師などにくらべて像高がいちじるしく小さく、現在の内陣須弥壇には、最初からこれらの像を安置するようには取られていなかったようであるから、創建当初にはまだ計画になかったこれらの像を、少し年月をへてから追加したものであろう。様式的にも、先に上げた諸仏の中では一番新しい。ゆえにここでは、主として盧舍那仏と脇侍の千手・薬師の三尊について考察を加えることにしよう。

第一の盧舎那仏(図版Ⅱ中央参照)は、脱活乾漆と言う技法が全く天平時代独特のものであるばかりではなく、抑揚のある切長の眼、おうらかな鼻や唇、ゆったりした頬の曲線等から成る仏顔の表情は、雄大・崇高な威厳に満ちながら、その上にいちまつの渋味をすらたたえている。たつぷりとした軀幹のつかみ方には、多少横への張りがめだってきてはいるが、まだ十分に自然な柔みを持ち、ことに衣紋では、衲衣の、胸元で折り返えった布端の細かな波うちや、膝からその前へかけて複雑に変化する襷の動きにも、衣の質感をとらえようとする写実的表現手法がゆきわたっている。印を結ぶ手の指の一本一本も、我々に何かを物語っているようなデリケートな動きを感じさせ、このような表情の多い指は、例えば東大寺法華堂の諸像にすでに観ることができものである。このような盧舎那仏の様式は、やはり天平時代の範疇に入れて理解すべきであろう。

これに対して、千手観音(図版Ⅱ左参照)と薬師如来(同上右参照)に我々がまず気のつくことは、いずれも木心乾漆になることのほか、肉附の調子が、全体に弾力を失って固さが感じられると言ふことであろう。例えば顔の輪廓にしても、盧舎那仏が持っていた頬のやわらかさが無くなって、顎に張りもめだってきた。眼のふちも、切長の中に一段と強さが加わり、唇の引締りも誇張されて、表情には一層の厳しさが増している。衣紋では、盧舎那仏の自然な髪から、孤線を重ねて畳みこんで行くような、形式的に整頓された衣紋へと変りつつあることが見出される。もともと天平様式では、体軀や四肢が自然なバランスをくずさぬようにとらえられていた。しかし、薬師如来像の正面観で我々は、異様に大きな腿と、脚にかかる衣の襷を全て股間に集めて流す、いわゆるY字型衣紋とを認めるであろう。この二軀の像に観られる以上のような様式的特徴は、以前から貞観時代様式の諸要素の中に数え上げられてきたものであった。

さて、ここにも三尊の同時造顯説と、中尊と脇侍の年代差を主張する論とが対立している。今前者を説く毛利博士に

従うと、盧舎那仏の台座の墨書銘に発見された、ほぼこの中尊の作者の一人と考えられる「物部広足」なる者は、すでに文武天皇三年頃に役小角に師事していた外従五位下韓國連広足と同一人物で、その生存可能な年代の幅を想定すれば、盧舎那仏は天平宝字三年をはるかに下って造られるようなことはあり得ない。そして、天平宝字と言えはすでに天平時代の後期、おのずと新時代への革新的な動きが様式の上に現れ始めて来てもよい頃にさしかかっているから、兩脇侍はこのような新しい芸術感覚を養った作家の手になるのに対し、中尊は、物部広足などと言う奈良朝の初期から連綿と生き続けてきたような保守的な仏師が造ったものと考えれば、様式の相異をそのまま製作年次のへだたりと解する必要はない。と言うことになる。けれども、文書にみえる限りの「物部広足」は、どうも高位の人とは思われず、文武朝にしてすでに外従五位下を授けられていたいちおうの貴族が、宝字頃に無位の工人と同じ身分の仕事をしたとはちよつと受け取れないから、これはやはり同名異人とすべきであろう。したがって、中尊と脇侍の様式に現れた差異は、改めてその意味をよく考究してみる必要がある。

そこで後者の立場であるが、これには久野健氏の最近の説が有力であろう。久野氏は、脱活乾漆と木心乾漆の底に全く異った本質を見出すことから始められる。即ち、もともと脱活乾漆は漆と麻布を交互に重ねて成形して行く技法であるが、この脱活乾漆は、麻布一枚をはるごとに漆の乾くのを待ち、その上で又布をはると言うように、もしそれ一鉢だけを製作するとすれば、時間とてまの点で非常に不経済な造像法で、むしろ、造寺司配下の造仏所と言うような強力な組織の中で、他の同じような仏像といっしょに製作する、いわゆるマスプロ方式にてきしている。そして、文書にみえる『漆部造弟磨』、『物部広足』を始めとする五人の名前からみて、この盧舎那仏がそうした造仏所の官人の監督を受けて造られたのではないかと推測される。ところが、脱活乾漆の持つ不経済性を少くし、より単純な組織で短時間にてまをかけずに乾漆仏を製作する方法が考え出され、木心乾漆が誕生した。一方、官寺の造仏所も延暦年間には廢

止され、仏像を多量生産する組織が失われたため、木心乾漆はいっそう世の脚光を浴びてきた。それとともに、奈良朝では官の造仏所が諸寺の需要もまかなっていたのに、平安朝になると、造像手段は、個々の寺院が私的に所有するようになってきた。はたせるかな、薬師如来の光背に『右自下七枚奴彫之。左自下七枚乙尊彫之。』<sup>(9)</sup>と言う銘文が発見されたので、千手観音と薬師は寺奴を中心とする唐招提寺の私仏所で造られたのではないかと想像されるようになった。こうした背景からみて、盧舎那仏は少なくとも延暦以前、即ち宝亀頃、千手と薬師はそれ以後、弘仁頃の作品ではないかと考えられ、様式の示すところともよく合致する。と大略以上のような論旨である。

私は原則として久野氏の説に従いたい。しかしその意味は、この金堂の三尊がけっして一度にできあがったのではなく、それぞれが年代をおいて一つ一つ造り加えられて行ったことに注目する。と言うことにおいてである。先に、中尊の盧舎那仏と両脇侍に相当の年代差のあることがわかったが、こんどは千手観音と薬師如来とを比較するといかがであろうか。最初に、千手観音立像の高さが五三六糎もあるのに、薬師如来立像の高さは三七〇糎しか無く、法量では坐像の中尊にむしろ近いことに注意しよう。尤も、薬師の台座は、像の背丈を千手観音に合すためにことさら高く造ってあるので、観たところ特に不均衡は無いが、それにしても、脇侍の一方が他方に対していちじるしく小さいことは否めない。(図版Ⅱ左・右参照) 二像の間のこのような不調和は、両脇侍が同時に計画され造仏された時にはたしておける現象であろうか。このことはやはり、千手と薬師との間にも造立年代の違があることを物語ってはいまいか。

そこで再びこの二仏について様式を比較すると、千手と薬師との間にも感覚の開きがあることを認めるのである。

千手観音は、中尊と比較すればあちこちに貞観的な表現が指摘された。しかしこんどは薬師にくらべると、はるかに天平的な余風が残っている。体軀は、内側から外へり盛り上って来るある種のエネルギーがいまだ適当にセーブされていて、胸の豊かな肉付けから、胴部の締め、そして腰部の張り、と言う具合に流れて来る体の側線には、まだまだ



自然な抑揚感は失われていない。胴に対する脚も適当な長さを保っていて、あのおびただしい脇手を除いた千手観音の本体は、いがいにすらっとしたさわやかさを感じさせている。

薬師には、このような縦への動きを誘う視覚性はいっそう少ない。顔の表情も、千手よりさらに生硬であり、胸も腹も千手よりはるかに巾広い印象を与え、胴の締りも少ない。そして両腿の誇張は、腰から下をいやがうえにも重々しく観せている。ところが衣紋だけは、千手観音よりも浅く彫られていてさらに硬く、ことに、Y字形衣紋と言われる股間の襷に彫りの浅さがめだち、形式化も進んでいる。薬師如来に現れた、肉附の強調と襷の退化と言う二律排反的な現象は、この薬師よりもさらに後に造られた、同じ金堂壇上の梵天や帝釈天にいっそうはつきりと認められることからみると、これは、天平様式から貞観様式へと作風が変遷して行く過程の上に現れた、唐招提寺内での一種の固有的特色と考えられるが、いづれにしろ、千手観音と薬師如来の間にも様式の異りがあり、それは、とりもなおさず製作年代の前後を意味してはいないか。今私は、薬師如来に千手観音以上の貞観様式の深まりを観た。それは、天平時代を通してつちかわれた、充実した三次元的空間感覚をもとに、新たに伝えられた中唐様式の影響によって、一種独特の肥満形態として形式化されることであつた。しかも、像の横巾の割合を千手観音よりも広く取りながら、丈量だけを千手観音と同じ高さにすればどのようなようになるであろうか。言うまでもなく薬師如来は、千手観音、いや、中尊の盧舎那仏などよりもはるかに大きな物として眼にうつるようになるであろう。貞観彫刻は、ある意味では明らかにアンバランスの芸術である。しかしこのアンバランスは、天平芸術のいかにも自然な調和感に比較した上での不均合であつて、貞観彫刻はそれなりの別種のバランスを作っていると言える。従つて仏師たちは、肥満の様式を最も美的に表現するために、像の横巾に対する丈量を一定の割合におさえておかねばならなかつたであろうし、何よりも、脇侍の薬師如来が中尊よりも大きな印象を拜者に与えては、三尊その物の美的調和がくずれ去るおそれがある。ゆえに、いきおい薬師如来

の丈量は、千手観音よりも小さめに割り出されねばならなかったのであろう。しかし、ただそれだけでは千手像との均合を欠くので、丈量の足りない分については、かなり背の高い台座によっておぎなひをつけたのではなからうか。

尤もこの場合にも、千手観音はより保守的な作家の、薬師は進歩派の仏師の作品とそれぞれ考えて、両脇侍が同時に造られはしたが、流派の異なる仏師が一鉢づつ分担したので作風に差異が生じたものとも解釈され得ないことはない。けれども、頬から顎にかけての肉附けや、眼・唇等の形、更に衣紋の基本的な彫法などを比較すれば、やはり一貫した手法が認められ、そのほか、この二像の足裏には、台座の底、或いはそれ以下にまで達する非常に太くて長い柄が出て、像の身体は事実上この柄によって立ち、蓮華座と数段の框座は、この柄をあらわにしないように外側からおおいかくす役割しかはたしていないが、このように、その安置法さえも又千手と薬師は全く同じなのである<sup>(8)</sup>。以上の事実から、この両像の作者は、大きな意味でやはり一つの流派に属していたとみるべきであらう。しかも、それにもかかわらず両像の美的内容に一つの相異が感じ取られることは、流派の様式そのものが歴史的に発展したことを意味するものと認めねばならないのではなからうか。即ち、ここで私が問題としたいのは、唐招提寺金堂の仏像はある時期に一度にできあがったのではなくて、これも又長年をかけて順に造り加えられて行ったのであり、その造仏にはある一定の流派に属する仏師達が長期にわたって事に従い、唐招提寺での造像期間の中において、その流派が、おりから天平時代より貞観時代へと言う美的理念の大きな変革期に当り、様式の生長発展をとげた事実を認めようとするところにある。そして、この歴史的事実こそ、別に説こうとしている唐招提寺派木彫群をめぐる問題点の重要な背景を作っていると考えるのである。

ただここで我々は、この木心乾漆造像流派が貞観彫刻の成立の上にどれ程の意義を持っているかを、改めて反省しておく必要がある。久野健氏は、先に示した論旨の中で、脇侍の千手と薬師が貞観彫刻であることをたびたび強調され

ていた。ただここで気をつけねばならないのは、これらの脇侍が、宝龜にできたと思われる中尊の盧舍那仏よりもはるか後年に製作されたことを説くために、盧舍那仏の天平的性格に対して、両脇侍の貞觀的要素を対比的に指摘されたままであって、二像が新時代を最もよく代表するにたる仏像であるか否かは少々別のことがらだと言うことである。この流派の人々は、中尊の脱活乾漆とは違い、木心乾漆造の工人であった。ところが、この木心乾漆はすでに天平時代の後半期に盛に行われた技法であって、なにも貞觀時代に初めて現れる造像法ではない。天平後期の木心乾漆像には、聖林寺十一面觀音を初めとして、普賢寺大御堂十一面觀音・法隆寺伝法堂や綱封藏の諸像・西田堂峯藥師・興福院阿彌陀三尊、等いくらでも数え上げることができ、現に、この唐招提寺にも多数の木心乾漆仏の殘闕が講堂に残っていることは、人々のよく知るところである。そして、数々の例に徴しても、木心乾漆仏を製作する仏師達は、やはり天平時代の伝統に強く生きた人々であって、平安時代に入っても旧様式を守ることのなかなか根強いものがあつたことが推察される。例えば、西大寺の木心乾漆塔本四仏像は延暦に下つての造頭と言われるが、これも様式の主調は天平にあり、高山寺や神護寺の乾漆藥師如来坐像なども、以前から天平の余風を残す貞觀初期の像と考えられている。そのほか、現在天平末期に組み入れられていながら、あるいは実年代が平安に下つてはいまいかと疑われる作品も多い。ひるがえって、唐招提寺金堂の木心乾漆千手觀音と藥師如来をもう一度觀るならば、さきほどから何回も述べてきたように、千手觀音にはまだ天平の要素が多かった。体軀や衣紋の表現は言うまでもなく、盧舍那仏よりも重厚さを増した容貌にしても、それを神護寺や元興寺の木彫藥師立像と比較すれば、まだまだ前代的な表情であることがわかり、これと同じ系統の表現になる藥師如来の顔も又、ほんとうの貞觀仏の相からは遠い。ただ、藥師如来の正面觀には、天平様式をかなり思い切つて破ろうとする表現意図が十分うかがわれる。しかしこの藥師でさえ、像の側面にまわつて觀ると、盧舍那仏とはあまり変わらない程度の厚みしか無く、誇大な感じの面靨にしても、それは正面から眺めた場合

の印象で、側面からみると、腿肉の前方への盛り上りはほとんど認められず、きわめて低平なものにはあんがいの感すらある。貞觀様式をささえるあの肥満形態の本質は、なにも正面觀で横への張りを目立たせることではなく、特に腹部から腰部にかけての奥行を強調するところにある。例えば同じ壇上の木影梵天・帝釈天立像の側面は、正面とくらべて不均合なほどのヴォリュームをみせている。このように觀て来ると、 hands 觀音や藥師如来を造った流派は、本質的には天平の美的理念に生きる保守的作家であったことが分るのである。おそらく、この仏師達は唐招提寺にくる以前から色々な寺院の仏像を製作し続けていたのであろう。そして、その伝統によつて十分に蓄積された彼等の技術の全てをかけて、この唐招提寺金堂の大像にいだんだのである。従つて彼等の内に持つ造形感覚はもちろん天平的なものであつた。ところが唐招提寺の造像に従っているちやうどその頃が我国彫刻界の轉換期でもあつたのであり、彼等は自然に周囲から旧様式をすて、新様式への脱皮を迫られたことであろう。そして彼等は、一軀を造るごとにみずから反省を加え、次の像には部分的にもせよ新しい感覚を盛り込むことに務め、次第に彼等の流派の様式を變貌させて行つたのではなからうか。以上のような意味で、本流派の貞觀的潮流に対する対処の仕方は、やはり消極的であつたと言わねばならない。

しかし、今平安時代の開幕に当り、少なくとも奈良時代に於て仏像を造つていた作家達は、全てこのような消極的な順応を示すだけで消え去って行き、平安初期は、従来の伝統を全く持たない新興作家のみから生み出されて来たのであろうか。言い換えれば、貞觀彫刻を創造し、その本流をささえる作家達は、最初から天平様式とは無縁な作家であつたのであろうか。もしや天平時代に生きた作家群の中から積極的に新時代の芸術を追求し、創造に成功した流派ははたして無かつたであらうか。

## 五 講堂「唐招提寺派」木彫群への今後の課題

我国の彫刻史界で最近特に注目を集めている問題の一つは、貞観彫刻の成立に関する問題であろう。即ち、調和とバランスのとれたフォルムの中に、自然でリアルな感覺性を追求する、きわめて古典的な様式を持っていたあの天平彫刻が、どうして、ヴォリュームの誇張と抽象的・形式的な細部表現を通して、より超越的な精神性を表出せんとする貞観彫刻へと変様していったのか。しかもその時期はいつ頃か。あるいはまた、天平時代の彫刻素材は、鑄銅を初め、塑土や乾漆であったのに、貞観彫刻は、どうしてにわかに木彫仏として誕生して来たのか。しかもこの木彫と言う素材が、これ以後我国の彫刻の主流となるに至る理由はいかなるものか。等々の諸点について、古くから多くの論究が企てられながら、今日もなお十分に解明されてはいないのが実情である。

その中で、貞観様式の諸特徴をそなえに最初の彫刻が、唐招提寺講堂にある木彫仏、ここで「唐招提寺派木彫群」と呼んだ一連の作品である。(図版Ⅲ参照と言うことは諸説の一致する所である。そこで、この唐招提寺派木彫群に貞観彫刻発生のいろいろな意味を讀みとろうと、数々の試みが行われている。私は、その内で次のような見解に注目したい。

- (1) この木彫の様式は、それ以前の我国の彫刻の中に源流を求めることの出来ない、全く新しい作風であって、これは恐らく鑑真和上に従って来朝した唐人の製作によるものであろう。<sup>(9)</sup>

- (2) そこで、この製作年代は、唐招提寺の創草の天平宝字三年をあまり下らない時期、即ちいわゆる天平後期であろう。<sup>(10)</sup>

- (3) そして、この唐招提寺派木彫群の出現が契機となって貞観彫刻は出発した。附言すれば、この時期に貞観様式

## 唐招提寺伽藍の創立をめぐる問題

## 七四

は発生した。<sup>84)</sup>

私は、従来からかなり普遍的に行われてきたこのような考え方について、もう一度さやかな反省を加えてみたいと思っている。なぜならば、貞観彫刻の発生の問題を追求する資料が非常に少ないと言う現実に、唐招提寺と言う一寺に宮まれた彫刻に対してあまり多くの意義を期待し過ぎてはいないか。もう一度事実にとつて研究し、彼の木彫群をもっと正当な次点で再評価すべきではないか。と言う疑問を持つからである。

まず第一に、これらの木彫がはたして天平宝字三年に近い時期に造立され得たであろうか。この疑問は、先に述べて来た伽藍の創立事情によって明らかになったと思う。即ち、唐招提寺は天平宝字七年鑑真和上歿後になってやっと建立事業が正式に動き出したのであるから、これらの仏像がそのように早く造られていたとは考えられないのである。ことに、最近久野健氏は、木彫群の内不空繡索観音二軀の一軀は繡索堂の本尊ではないかと論じられている。<sup>85)</sup>この繡索堂が少くとも延暦をさかのばらないとすると、彼の像の年代もその前後と推定されてくるから、これらの像は、今日、美術史上で一般に用いられている時代区分に従えば、何も天平時代なのではなく、既に貞観時代に入ってから造像と言うことになる。となれば、豊かなヴォリュームを持つ肉体と厳しい精神を秘めた表情によって表されている、あの木彫群の様式は、当然現れるべくして現れたと言うべきではなからうか。

ところで、いわゆる貞観様式の典型的な作品は、この延暦年間に忽然として次々と現れて来る。例えば神護寺・新薬師寺の本尊がそうである。ではなぜこの延暦の時期に貞観様式が成立するのかと言う問に対し、それは前代の天平時代の中においてすでに次代への胎動がさかに行われており、それが延暦に於て正式に誕生をみたのだと言う考え方から、今までからも天平時代の彫刻の間に内に秘められた貞観様式への志向性が探られてきたし、その最も典型的な現象として唐招提寺派木彫群が意識されたのであった。

しかしながら、ここで私の述べたいのは、なるほど、天平彫刻の内に貞観彫刻の諸前提を見出そうとするそのことは正しいではあるが、あの彫刻の出現が来るべき新時代を刺戟したのではなく、むしろ、天平から貞観へと言う時代的展開があり、それに即応して現れて来た様々の新しい作風の中にあつて、特にあの表現形式によって実現された一流派の様式が、結局彼の唐招提寺派であつたのではないのであろうか。言いかえれば、貞観様式の天平時代に於ける胎動の典型的作例として、この唐招提寺派の木彫群を無条件に扱うことはできないのではないか。と言うことである。

そこで改めて問題となるのは、この木彫群が鑑真に随行して来た唐人工匠の作品であるかどうか。である。従来、その文献的裏付とされて来たのは「唐大和上東征伝」の第二伝にみえる『彫檀鑲刻師』の記事である。即ちこのような工匠が我国に渡来して唐招提寺で造仏したとすれば、それに最もふさわしい様式の仏像が「唐招提寺派」である。と言うのである。けれども、第六伝、鑑真が我国へ到着した時の随員の記事中に、このような工匠は結局含まれてはいなかった。しかも、たとえ来朝のことが事実であつたとしても、彼等が当然製作しても良いはずの金堂の本尊は我國の仏師の造仏であり、逆に彼等は羅索堂などのような附属堂宇の仏像しか造像しなかつたことになつて、これは全く不可解である。その上、天平宝字三年に來朝した彼等が延暦近くまで、造仏を我國の仏師にまかせたまま、いったい何をしていたと言うのであろうか。とにかくここが、唐招提寺派諸仏を簡単に唐人の作と決定できない一つの疑問である。

それにもかかわらず、これを唐の仏師の作とするもう一つの根拠は、この仏像が単に貞観様式であると言う以上にきわめて中国的だと言うことである。しかし、今日、我國の彫刻の内にみられるいわゆる中国的作風とは何か。と言う概念規定が未だ不十分である。故に、唐招提寺派の仏像と中国唐代の彫刻との様式的比較から、それを論証しよう

とする試みも成されてはいるものの、その論証自身の中に数々の問題を含んでいるのが現状と言えよう。そこで、唐招提寺派の場合、当時我国の芸術は常に中国大陸から新風を受けることによって初めて様式の発展をみたのである。と言う考え方を前提として、今それらの作風がいわゆる日本的ではない故に中国的であり、中国的様式であるが故に唐人工匠の作に擬せられて来たうらみはないであろうか。尤も私は、彼の群像の様式は全く日本的であると述べるつもりはない。むしろ広い意味ではやはり中国的と言うべきであろう。しかし、あの像を表現した人間が中国人であつたかどうかは別の問題であり、私は、そこにむしろ我国の仏師を想定してみたいのである。それには、先にも触れたような文献上の問題ばかりではなく、造られている素材が一般に日本の特産とも言われている松材の彫刻である点を指摘したいが、何よりも私は、これらの群像は、一つの新しい作風を持つて渡来した唐人仏師が、唐招提寺の中で、ある特定時期に一括して造り上げたものではなく、むしろ個々の作品の間には、様式的にみて明らかに前後関係が、言いかえれば、いわゆる様式の発展と言うべきものが認められること、それは伝大自在王菩薩像を出発点として伝衆宝王・伝獅子吼・伝薬師らを頂点とする、天平的なものから貞観的なものへの発展であること、しかもこの系統に近い様式の作品が、唐招提寺の外部にもある程度の拡りをもって見出されること、等の諸点に注目するのである。そして 去る昭和三十八年五月十七日、本学で開かれた美術史学会大会で私が発表したところも、この点を実証しようとしたものであつた。また本稿において、唐招提寺伽藍成立の状況や、ことに金堂の乾漆三尊仏の様式変遷についてかなり詳しく論じようとしたのも、唐招提寺派の仏像が、唐招提寺の内においてあの作風を形成し発展させ、それが日本芸術の時代様式の変遷に根ざしたものであつたことを立証する上に、大きな背景を成すものと考えたからである。

しかも、もし日本の仏師が彼等の理想の美を求めて刻み上げた仏像が、なおかつ中国的であつたとするならば、それ



は、唐招提寺と言う特殊な環境のためとも言えようが、あんがい貞観芸術の本質的な一面をのぞかせているとは言えないであらうか。しかし、以上のような諸問題に対する私の見解については、改めて述べることにしたい。

註(1) 諸寺縁起集所収。

(2) 福山博士「唐招提寺の建立」(歴史地理六〇の四)、田中重久氏「唐招提寺創立の研究」(歴史と国文学一二の四・一三の一、同氏「唐招提寺の創立」(大和志七の二)、毛利博士「唐招提寺私考」上・下(史迹と美術一九五号・一九六号)。

(3) 小林博士「唐招提寺金堂の建立」(「日本彫刻史研究」所収)、毛利博士前掲論文。

(4) 豊安撰 大日本仏教全書一一三。

(5) 日本後紀。

(6) 今「唐招提寺論叢」所収福山博士校定本による。

(7) 藏田嘉一郎氏「聖僧と非時葉」(叢考第一輯)

(8) 福山博士東洋美術特輯論文。久野氏「唐招提寺の彫刻」(「唐招提寺」近畿日本叢書)

(9) 日本後紀

(10) 久野氏は、大同三年九月と弘仁三年七月にそれぞれ五十戸が寄せられたと述べておられるが、同氏としても続日本紀に宝龜七年播磨国の五十戸を施入したと言う記事があることは念頭に置かれておられるであろうから、当時封戸は百五十戸に達したと考えておられるのであろう。ところが唐招提寺第三世の豊安は、「唐招提寺建立縁起」の中に『一封戸五十烟』としか記していないのは、豊安の誤記であらうか。いや、そうではない。久野氏の言われている大同三年九月の封戸とは、おそらく日本後紀同年九月十六日の条を指していることと思われるが、今この条を書くとき次の通りである。

勅、権入食封限立令条、比年所行甚違先典、其招提寺封五十戸・荒陵寺五十戸・妙見寺一百戸・神通寺廿戸、宜且納穀倉院。

即ち、権入の食封は禄令に五年以下と限られているが、この令条がよく守られず、長年にわたって寺が封戸を得ている現状に対して禁制を加え、諸寺と共に年限を越えて久しく封戸をむさばっていた唐招提寺が、この時に至ってついに停止を受けものである。この五十戸の封戸とは、恐らく宝龜七年施入の五十戸のことであらう。とすれば、次の弘仁三年に改めて下

唐招提寺伽藍の創立をめぐる問題

## 唐招提寺伽藍の創立をめぐる問題

七八

されるまで、唐招提寺の封戸は全く無くなっていたことになる。そして弘仁三年にもう一度賜った分を豊安が記したのである。

安藤博士も同説。

(11) 近畿日本叢書「唐招提寺」に於ける浅野博士の建築解説による。

(12) 「唐招提寺大鏡」参照。

(13) 福山博士「唐招提寺の造営」(「唐招提寺論叢」所収)

(14) 福山博士は、彼が別当になったのは彼の致仕した天平宝字八年九月以降のことと考えておられるが、彼が薨じたのは宝亀元年十月九日であるから、この間は大体その任についていたであろう。

(15) 延暦僧録第二、沙門釈浄三菩薩伝、日本高僧伝要文抄第三所収。

(16) 続日本紀。

(17) 類聚三代格卷二、經論弁法会請僧事。

(18) 寧楽遺文、中巻、經濟編上。

(19) 浅野博士前稿。

(20) 福山博士は、浄三が大鎮になったのは宝字八年九月以降であるから、講堂の移建もそれ以後のこととされる。しかし浄三が法華寺大鎮、浄土院別当になった記事の後に朝集殿移建のことが続くと言つても、これらを一連にして解釈する必要はない。むしろこの二つの記事は意味内容からみてまたがいに独立しているとみるべきではないか。しかも浄三伝では彼の事蹟が厳密に年代を追って記されていると言う保証もない。文の構成上多少前後させることもあり得よう。ことにこの場合、彼が法華寺大鎮、浄土院別当であつたことは別に、鑑真的菩薩戒弟子であつたことをあきらかにするために、わざわざ九間屋施入の一件を挿入したものと考えられる。従つていづれにしろ、彼が法華寺大鎮になつた後初めて唐招提寺講堂移建の別当になったとせねばならぬ必要は無い。なお又博士は、たかが建物の古材を一介の私寺に下げ渡すことだけに、浄三が別当に任命されたことはおかしいから、この条は思託の作為であろう。と説かれるが、朝廷が内裏の建物を施入したと言うのとがらの中に、朝廷が唐招提寺を尊重していたことがうかがえないであろうか。従つてその移建に一種の格式を与えるためにも、浄三が別当に任命されるようなこともあるいはあり得たのではないかと考えられるがいかがであろうか。なを、和上在世中に於ける浄三の最高位階は正三位、官は大納言である。

(22) 奥書は次の如し

長和四年歲次乙卯七月十六日

大安寺竹院小子房抄三享之。

(23) 続日本紀。

(24) 建立緣起が仲麻呂の施入としているのは、食堂建立の最初の足がかりを与えた彼の名に榮譽を与えたのであろう。しかしいづれにしろ没官された仲麻呂邸の家屋が施入されたとされる福山・喜田阿博士の説は信じられない。

(25) 続日本紀。

(26) 福山博士・田中重久氏等の説に従うと、右京五条二坊の九・十・十五・十六の四坪が当初の寺地で、東方に地城が拡がつて七坪に塔が建つたのであろう、とされている。

(27) この銘文は明珍恒雄氏が籠字で東洋美術特輯日本美術史寧楽時代中に公表され、仏工名と思われる部分については小林剛博士「漆部造弟磨と物部広足」(國華七〇二号)にも考証されている。

(28) 久野氏前掲書。

(29) 東洋美術特輯参照。

(30) 尤も、薬師の台座の上面が比較的高い位置にあるので、足柄は台座の底、即ち須弥壇の上面に接して止っているが、台座の低い千手の場合は、台座の底を突きぬけて下に伸び、須弥壇に掘られた竪穴の中に挿入されている。

(31) 例えば、正面から観ては比較の肥満の感じられない法華寺の十一面観音も、側面から観れば、うつてかわつて厚い奥行を示している。貞観彫刻は、このように軀軀の厚みがより強調されるのであつて、正面観が肥満しながら側面の薄い像と言うものは、今のところ例は極めて少ないと思う。

(32) 松原三郎氏「唐代玄宗彫像考」(「中国仏教彫刻史研究」所収)、町田甲一氏「上代彫刻史上における様式時期区分の問題」下(仏教芸術三九号)

(33) 太田古朴氏「初期唐招提寺彫刻木彫四仏」(史迹と美術一九九号)

(34) 例えば、「日本美術大系」彫刻篇の金森蓮氏解説、そのほか、これらの像を天平時代と考えることによって間接的に説をにおわせている例は非常に多い。

(35) 久野氏前掲論文。及び図版Ⅱの左像参照

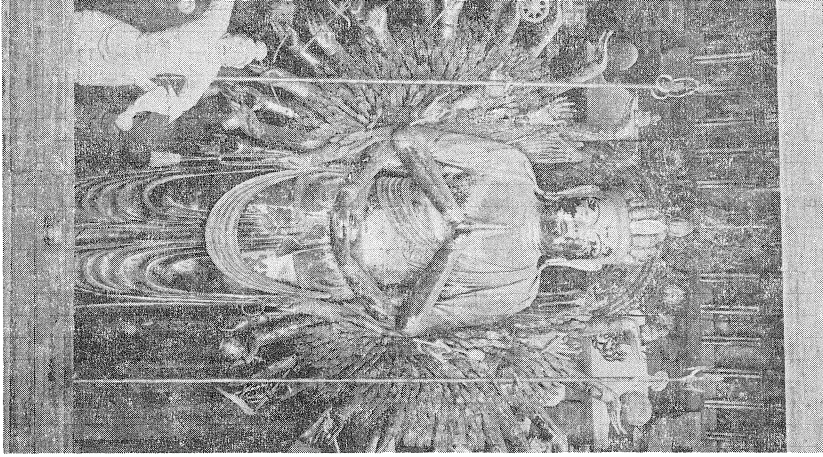
## あ と が き

昭和三十八年五月十七日から三日間、美術史学会全国大会が我が関西学院大学において開かれ、その際私は、現在も唐招提寺講堂にのこる平安前期一本彫像（図版Ⅲ参照）のあるグループ、即ち、二軀の不空羼索觀音（伝衆宝王・伝獅子吼と呼ばれるもの）伝薬師如来、それに伝大自在王菩薩、旧法花院十一面觀音、持国天・增長天の各像を中心に、これと様式的に關聯を持つ他寺の諸彫刻をも含めて「唐招提寺派木彫群」の仮称のもとに、一通りの私見を発表した。

その後、諸方面から叫正もいただき、私自身も反省を加え、稿を改める努力を続けているが、その木彫群を通して私の述べようとしている問題を明確にするためにも、木彫群の背景にある唐招提寺伽藍の創立について、ひとまず先に、私なりの考察を加えておくことが必要ではないかと考え、ここに紙面をいただくことにした。

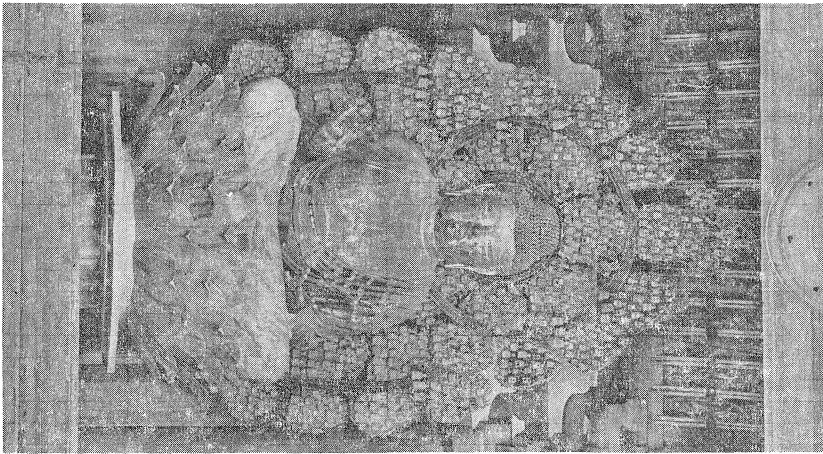
ただし、唐招提寺の創立についてはすでに数々の研究が成されていることであり、この稿に於ても特に新しい見解を示すわけではないので、多少いままの感がしないではないが、いずれきたるべき主題への一つのステップであることを承認していただきたい。またその結果、問題の指摘のみがあつてけつきよく解答の無い稿と言う印象も無きを得ないが、この点も今後に期したいと思う。

金堂 千手観音立像

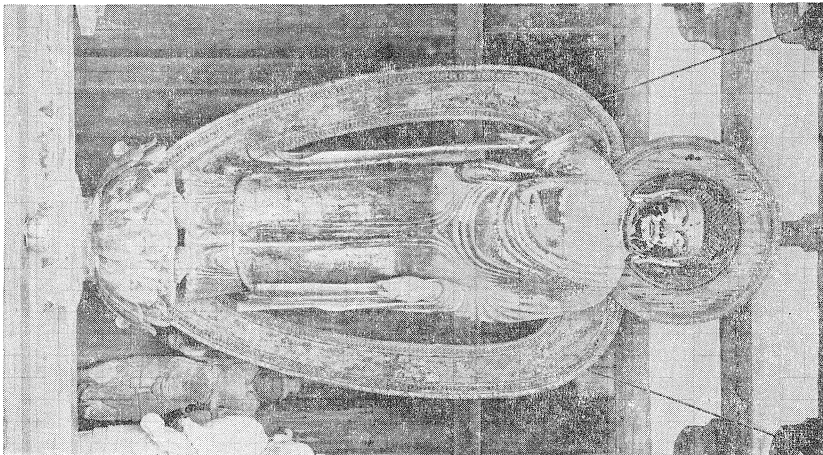


図版 1 金堂の佛像 (近畿日本叢書「唐招提寺」より)

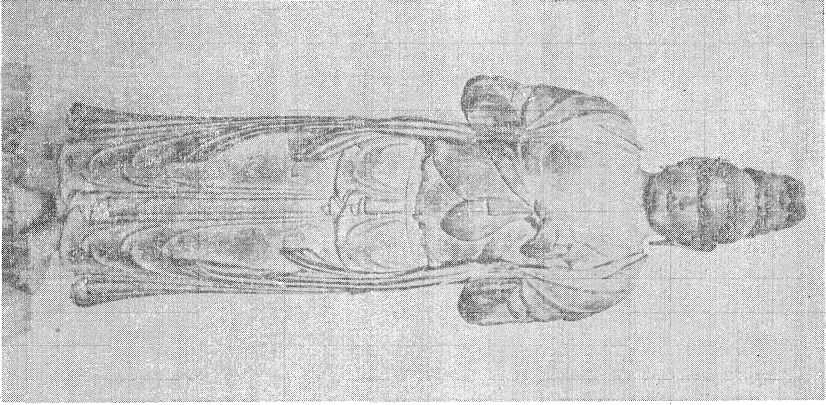
金堂 盧舎那佛坐像



金堂 薬師如来立像

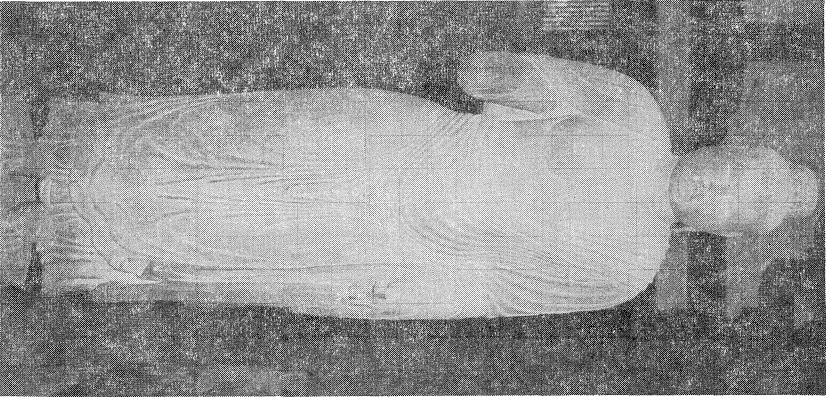


不空羼索觀音立像

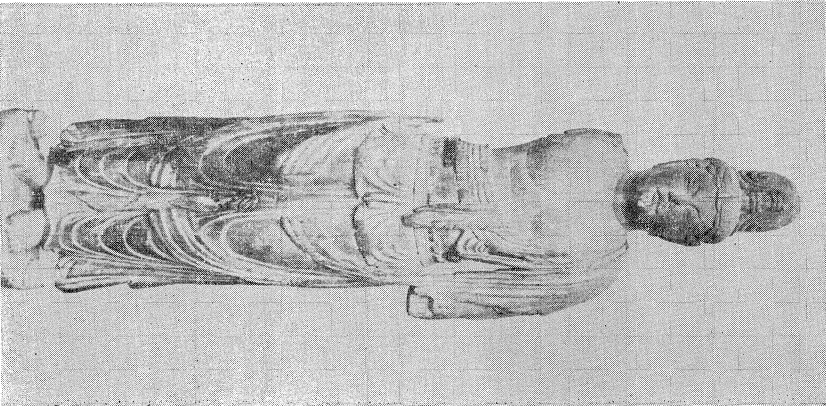


(唐招提寺大鏡より)

図版Ⅰ 講堂の木彫佛  
伝薬師如来立像



伝自在王菩薩立像



(唐招提寺大鏡より)